

令和5年9月14日(木)「教えて!!ドクターQ&A」

神奈川新聞③ マイコプラズマ肺炎

(質問)「マイコプラズマ肺炎」とはどのような病気でしょうか。どんな治療をするのですか。

(回答)マイコプラズマは、ウィルスよりも大きく、細菌よりも小さい一群の微生物ですが、この中には人の呼吸器などに感染して病気をひきおこすものがあります。「マイコプラズマ肺炎」は、マイコプラズマが肺に感染することによっておこる感染症です。マイコプラズマ肺炎は、幼児から成人まで幅広い年齢層で見られますが、特に学童期、青年期によく見られます。症状としては、発熱、だるさ、頭痛、頑固な咳などがあります。発疹が出ることもあります。マイコプラズマ肺炎の咳は解熱してからも長く続くのが特徴です。感染してから発症するまでの期間(潜伏期間)は2-3週間ぐらいであり、この間には知らないうちに他の人にうつしてしまうことがあるので注意が必要です。感染の経路としては、咳、くしゃみ、会話などによって飛び散った飛沫を吸入することによる飛沫感染と、患者に接触することによる接触感染とがあり、学校や家庭内で流行することがよくあります。

マイコプラズマ肺炎の診断方法には胸部レントゲン検査に加え、のどからのぬぐい液を用いた抗原迅速検査やLAMP法、血液を用いた抗体検査などがあり、簡便さや正確さの点で、それぞれ一長一短があります。肺炎球菌などが原因の細菌性肺炎にくらべ、基礎疾患のない若い人でおこりやすいこと、長く続く頑固な咳があること、周囲でマイコプラズマによる感染症が流行していることなどが、マイコプラズマ肺炎を疑う理由となります。

治療には、抗菌剤(抗生物質)や咳止めが用いられます。発熱や頭痛に対しては、鎮痛解熱剤が使われます。抗菌剤として主に使われるのはマクロライド系、テトラサイクリン系、ニューキノロン系などの薬であり、細菌性肺炎によく用いられるペニシリン系やセフェム系は無効です。全身の状態が良ければ外来に通院しながら治療することも可能ですが、高熱が続いたり、脱水状態であったり、咳がひどく睡眠や食事が十分にとれないなどの場合、入院が必要となることもあります。マイコプラズマ肺炎は繰り返しおこることがあり、またこの病原体は、肺炎以外にも、神経系や血管系の病気の原因にもなりうることが知られていますので、注意深く経過を観察する必要があります。